

日本の科学研究者の事件

○白楽ロックビル(お茶の水女子大学理学部)

1. はじめに

2005年9月14日、東京大学・工学系研究科のA教授(53)の英科学誌「ネイチャー」論文にデータ捏造があったと思われる、と報道された。

これとは別に、2005年5月、大阪大学・医学系研究科のB教授(42)とC教授(53)の研究チームがアメリカの医学誌「ネイチャー・メディスン」に発表した論文にデータ捏造があったと報道されていた。報道によると、論文のデータに関する実験ノートや実験用マウスが見つからない。データを捏造した学生はC教授(53)の個人口座に約200万円の寄付金を振り込んでいる。

さらに、2003年10月、東京大学・医学部産婦人科のD教授(当時53)は、研究費の不正で停職6カ月の懲戒処分を受けた。同教授は同様な不正で同年6月にも停職1カ月の処分を受けていた。

上記はほんの3例だが、バイオ研究者の事件が、最近多い気がする。で、昔から事件はあったと思うが、どうしてなくなるのか? そもそも科学研究者の事件の傾向はどうなっているのか? 有名大学、世界的に著名な科学者研究者、が不正をすれば、国民は大学教授や研究者に不信を抱く。それが、科学研究そのものへの不信につながる。どうしたらいいのか?

2. 材料と方法

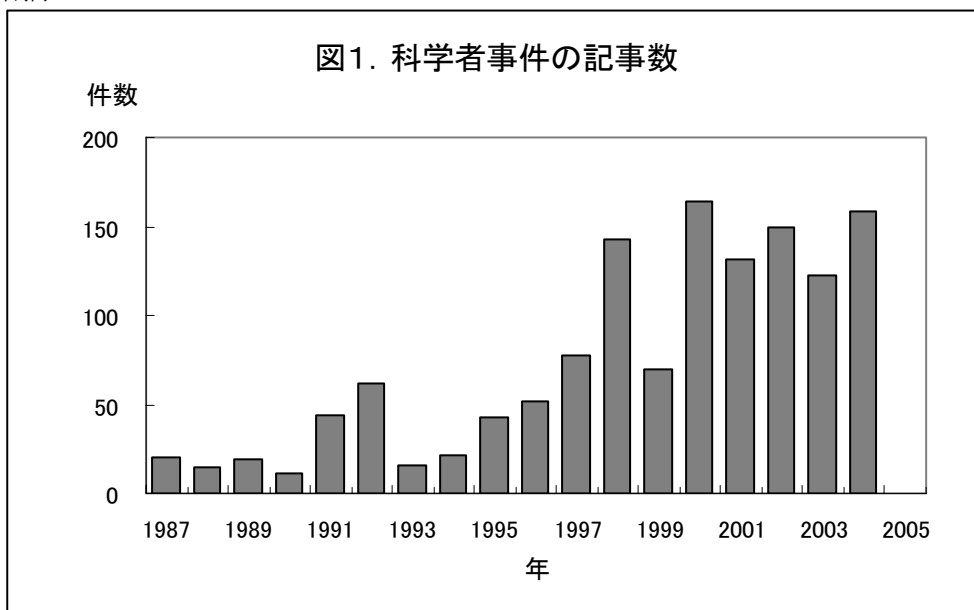
科学研究者の事件は、読売新聞の記事データベース「ヨミダス文書館」(有料)をインターネットで検索した[文献1]。

3. 科学研究者の事件の全体像

新聞記事データベース「ヨミダス文書館」で科学研究者の事件の記事数を検索すると、1987年から2004年までの記事数として、全部で1,319記事数がヒットした(図1)。

科学者の事件の記事数は、1993年の16記事数以降、その後6年間は直線的に増加し、1998年に143記事数になった。1999年は70記事数と前年の半数以下になったが、2000年以降2004年までの5年間はほぼ一定で、平均記事数は145である。では、日本の科学研究者の事件は近年急激に増加していると指摘してよいか?

事件の記事数ではなく事件そのものの数とその内容でみると結果は次のようだ[文献1]。
(1)他の自然科学分野と比較してバイオ分野での発生頻度が高い。(2)機関としては、バイオ研究者の不正行為の大半は大学で起こっている。(3)バイオ研究者の不



正行為では、「カネに絡む」事件が上位を占める。ではこれらはなにを意味しているのだろうか?

4. 最近多い事件: 研究費問題とセクハラ問題

2003年以降の科学研究者の事件を新聞記事数の変化でみる。「セクハラ」「名義貸し」「研究費」「兼業」が多い。1987年~2002年に多かった「収賄」や「研究材料」は減り、事件に流行(?)があることがわかる。

「セクハラ」と「研究費」についてみると、加害者の所属する分野は、「セクハラ」ではバイオ分野が15%なのに、「研究費」では83%とバイオ分野に際立って多い。加害者の職位では、「セクハラ」では教授が48%以上なのに「研究費」では75%以上と、教授が際立って多い[文献1]。これらはなにを意味しているのだろうか?

5. 日本と米国の違い

科学研究者の事件を日米比較調査すると、日米に奇妙な違いがある。

1つは、事件の内容だ。アメリカにも研究費不正やセクハラの事件があるが、数はとても少ない。逆に、日本ではめったに報道されない「データ捏造」、「改ざん」、「盗用」がとても多い。アメリカの科学研究者の3人に1人は、過去3年間にデータ改ざん(含・軽微)など科学上の不正行為をしている[文献2、3]。日本は多くの点でアメリカ化するので、今後ますます「データ捏造」、「改ざん」、「盗用」が問題視されるだろう。

2つ目は、研究者コミュニティが異なる点だ。アメリカでは科学研究上の不正を扱う政府機関として、科学公正局があるが、日本にはない。アメリカには科学公正局以外にも、科学上の不正を議論し調査し研究するNPO、研究室、大学院カリキュラム、出版物が多数あるが、日本にはとても少ない。この点も、日本はアメリカ化するだろう。

ただし、これらの違いは、日本の特徴なのか、アメリカの特徴なのか、また、研究者社会の発展成熟度の違いなのか、つまり日本が単に遅れている後進国なのか、十分理解できていない。

6. 科学研究者の私利私欲

アメリカでは、バイオ研究者の「役得」にメスを入れはじめた。政府委員となって不当な「得」をする。企業と連携し不当な「得」をする。研究費をもらった企業に都合のいいデータをだす。バイオ研究者が、医薬品企業や食品企業に取り込まれ、科学の真実や正義を大きくゆがめている[例えば、文献4、5]。いずれ日本も科学研究者の「役得」にメスを入れるだろう。

7. おわりに

それでも、研究者は事件をおこす。どうしてか? 一般的に、「科学研究者」の倫理を問題視する風潮が強いが、その視点は妥当か? それで解決し科学が発展するか? 研究者側からみると、「研究体制」側にも問題があるだろうと感じる。例えば、研究費配分、研究成果主義、高等教育カリキュラム、学会の機能不全、研究組織の国際化の対応不全、研究者と社会との関係不全などの問題だ。また、「一般社会」側にも問題があるとも感じる。例えば、マスコミの低俗さ、行政の能力不足、法律・裁判の科学オンチなどだ。「科学研究者」はこういう「研究体制」と「一般社会」の枠中で日々、科学研究をしている。「科学研究者」だけを切り離して論じることは、問題の本質を見失い、必要な対策を誤る恐れがある。

なお、本発表で使用したデータは、研究室に在籍した大学院生の松尾未亜と吉田雅美、秘書の林和子の協力を得た。記して感謝する。

参考文献

- (1) 白楽ロックビル、松尾未亜(2004)「バイオ研究者の研究費不正事件:日本編」科学技術社会論学会 第3回年次研究大会予稿集 pp. 285-286
- (2) Wadman, M. (2005) 「One in three scientists confesses to having sinned」, Nature 435, 718-719
- (3) Martinson, BC, et.al. (2005) 「Scientists behaving badly」, Nature 435, 737-738
- (4) Krinsky, S. (2003) Science in the private interest, Rowman & Littlefield, Pub., Oxford, UK, (ISBN 0-7425-1479-X)
- (5) Nestle, M. (2003) Food politics, Univ. California Press, Berkely, USA, (ISBN 0-520-24067-7)